

「西郷戦争」余談

弥生河(床木出身)  
会員 泥谷捨夫

明治十年西南の役、床木地元の者はみんな「西郷戦争」と呼ぶ。

明治十年夏のある日、大分方面で敗色濃厚となつた西郷軍は、お籠一つ、乗馬一人、銃持、刀だけ半々で、約三十数名が津久見から、宍越して床木谷を南下、大坂本井崎方面へやや急ぎ足で通り過ぎた。

その頃、床木の農家では必ず牛を一頭づつは必ず飼つていた。その牛を食われるかも知れぬと、役牛を我味にと部落の奥山に隠した。それも何頭も接近してつなぐと、牝が祭情して鳴くから、お互いの姿が見えぬ位分散してつなぎ、抽選で一人番人をきめて残し、綱巻きさせぬように監視させた。綱巻きというのは、牛が自分をつないでいる綱に足を掛け、はずす知恵のないままに右や左にまわり、中には首も掛けてもし倒れたら首をしめ、落命する牛も出るので、特に小牛の場合母牛を見まわらねばいけない。不自然に綱がからめば、はずしてやらねばいけないのである。

翌日の昼前に、大勢の官軍が追跡して来た。隊長は羽部落の河野小太郎(現在の河野秋義氏方)方に止宿、各戸には四五名から十名位官軍の兵が分宿した。筆者の家には野良仕事から帰つて見れば、十名ばかりが入り、又、畳をあげて中廊下のように中々と通り道にして、両脇へ畳を重ねて、中道へ足を投げ出して寝る状態の奥由。

筆者の父は明治四年生れで当時六、七歳、千ヨロ千ヨロ口するので、ひげ面の兵士が「塙、こちらへ来い」と盛んに話しかけるが、ズーズー銃らしい方言でわかりにくく、同志で話している事柄は、全然わからなかつたといふことであつた。

夕方になれば、岩の下部落の牧事場まで食事ととりに行き、桶や籠で山盛り運んで来て、それを兵ばかりでなく、家全員に食わした由。味噌や醬油は、取り敢えず治つた農家のものを使い、「あとで牧事場に取りに行け」と言われたが、農家のこととて大い余程自家製がたり、運びにくいものだから、ほとんど貰いに行かなかつたらしい。

当時の戸長は一瀬桂作(一瀬太氏祖父)だつた。「男子で二十歳から四十歳までの者は、病人以外、全員集まれ」のおふれが出た。簡單な身体検査をし、一見して達者そうなら、人並の身長あるものが選ばれた。「日当は松うので強制しない。合格しても尻に尻にする者は取らぬ。少々身長が足らんでも、進んで希望するものは採用する」ということで、結局採用は約二十名とも三十名ともいわれている。その辺のことを取材途中、有力な古巷が他界し、後記の二名だけは確認して、エピソードも取材に成功したので、以下公開することにした。

御手洗多四郎(現御手洗守氏祖父)の談話

採用された翌日は草敷作りだつた。今はいくらか田もあるが、当時は全部畑だつた。大向部落の前、道の両側に何十戸かの家といつてもいいから、おかげで小屋が出来た。杉皮葺き、藁葺きの野戦治療所を、村民総出で作り、奥由地元の負傷者や、病に倒れた者を全員集めた。息をひきとると名札をつけて、佐伯岡の各の墓地に運ん

で埋葬した。

負傷者の荒へばい治療には、見てゐる方が所をつぶした。寢床自撃した、足首の銃剣がすっかり化膿し、盛んに疼痛を訴えると、「アア、此の足首はもう駄目だ」といふ腰のあたりを台にのせ、刀で切り落して腕の動脈を一人が押さえ、焼酎を一人が口にふくんで、プーと霧状にして吹きかけ、切り口にガーゼに焼酎をしましたのをあて、白糸縫でクルクル巻いて血の滲るのを止め、「よし、次ぎ」といふたエ合であつた。

私は病院では雑役の日が多く、瀕死の兵から、「もう自分は死ぬので、この刀を形見にやる」といわれて、銘刀を一振りもらった。太平洋戦争後農家に刀があつては、米國からひどい目にあうとの流言を信じ、某神社に奉納した。これは多田四郎の子、即ち守氏の父である。今は故人の忠告が、「奉納した刀を返して」とは言わぬが、見せてくれ」とその神社にある軒下しこんだが、神社側も前説の米軍云々と信じ、石屋のハンマーを借りて、長さ三四十に打ち折り、箱の中に入れていたが赤さびていたので、その後境内を広めた折、十数本の石垣の外側コンクリの中へ、混ぜて埋込んでしまった。これは守氏からの聞き書である。

### 泥谷喜四郎（現松井氏祖父）の談話

軍夫に採用されたその日から、桂作氏から隊長宛の封書を書き、何の用事か一日何回も届けに行かされた。届けに行くと途中、向こうからも来ており、一々通儀風の振面に、受取の印を貰って来ねばいけなかつた由。

毎日隊長方へ通つていたが、ある日、明日は重岡方面に出発するといふのを聞き出し、日当を請求した。すると隊長の方では「一週桂作方から貰え」といふ。桂作氏

方では「それは隊長の方で貰え」といふ。困つてしまつた。

そこで喜四郎は万事に帳面を性質であつたので、毎日の作業内容等も書き記し、隊長方で日当日一括桂作戸長方へ出かけて「松うか、私わぬか」と迫つた。最後は「松うから待て」といふことになつた。これもまた文章に書いて「認印をくれ」と申し出た。戸長は舌打ちしながら、あつと三日分をくれれたとのこと、そしてもう自分から止められた由である。

確かな帳簿もなく、誰が何日働いたか、うやむやで直川方面まで行き働きたがら、満足に日当ももらえぬ人も多かつたとの事であつた。

余談だがこの喜四郎は、新製令が出てもなかなか髪を切らず、胡弓二十何年頃まで、千ヨシマゲを穿つたので、名前を言うより、「床木の千ヨシマゲ」といった方が、わかりよかつたとのことである。（おあり）

### 西南の役百周年は今年である（おあり）

○誤解があつてはならないので書いておこう。明治十年（一八七七）から臨百年たつた今年（一九七七）である。たのに佐伯史談会は、どうして昨年秋十一月、佐伯招魂所で慰霊祭をしたのか。理由はこうである。

○死没者の供養慰霊のことは、その年から数える。三回忌といふのは満二周年といふことになる。だから昨年が百年忌であつた。それとそれとして、今年が西南の役から数えて臨百年に当る。

○史談会としては、その百周年をおぼえて宇自所、蛇葛山や赤松峠を訪いたが、今秋十一月の西北九州の研修旅行の日程に、田原城の敷地を見学を加えたいと思つて下付けている。